

電気のアルミカン

再生資源のE-1

エネルギーは27分の1で済む

ジュースやビールなどのかん飲料は、ここ数年たいへんな勢いで増えており、昭和五十四年を見ますと一年間で約九十二億かんも造られています。昭和四十五年の約八億かんに比べて約十一倍にもなっているのです。

このように、かん飲料が普及した背景には、①軽くて輸送や持ち運びに便利 ②衝撃に強いのでこわれにくい ③冷えやすく、温めやすいなど、容器として優れている——といった特色があるからだとはいわれています。

一方「欠点」もあります。○持ち運びに便利のため「ポイ捨て」つまり散在しやすい。また逆に、ゴミとしてはかさばるため持つてかえるのに敬遠される。○紙などどちがって、焼却できない。

▽長所を生かす

ところで、長所と短所は「裏表」とよく言われます。持ち運びに便利だが、投げ捨てられやすい——というのは長所であり同時に短所でもあるわけですが、よい面は大いに活用するとしても、短所に「アグラ」をかいてしまうのは考えものです。「欠点」をなんとかカバーしてこそ、長所も生きてくる



——そんなふうには思いたいですね。また、空きかんは紙などと違って焼却できませんが、この短所を一挙に長所に変えるポイントが、再資源化です。

古新聞や古雑誌などのいわゆる「古紙再生」はもうおなじみですが、空きかんの場合も同じことです。空きかんには、スチールかんとアルミかんがあります。以前はすべてスチールかんでしたが、昭和四十六年にアルミかんができて以来、かんのアルミ化が進み、いまではビールかんの九十五%、炭酸飲料の三十二%を占めるまでになりました。

国では、道路わきや行楽地などの「空きかん公害」を防止するため、環境庁をはじめ総理府、厚生省、農林水産省、通商産業省、自治省など関係機関十一省からなる「空きかん問題連絡協議会」を設立させ、その対策を協議しています。

まず、空きかん対策についての基本的な考え方として、次の点をあげています。

- ① 空きかん問題の関係者——消費者、市町村、業界、散乱場所の管理者、ボランティア、住民などの当事者が協力して問題の解決にあたる
- ② 具体的な取り組みについては、地域の実情に応じて現実的、効率的な方法を検討する。
- ③ 政府は、一般へのPRをはじめ、処理体制の整備や再資源化のための回収体制の充実など全国的に共通する側面について積極的な対策を進める。

▽エネルギーの

「大食漢」

スチールかんは鉄のほかスズなどが入っているため、スクラップとして扱われる程度ですが「再生資源」として価値の高いのがアルミかんです。

アルミかんは、ボーキサイトだけでできているため「古かん」か

について検討が進められています。

- ① 政府・地方自治体は、空きかん散乱防止についての広報を一層充かせる
- ② 学校教育でのしつけをより強め、児童・生徒を通して家族にも

- その影響を及ぼすよう努める。また、運転免許取得時や免許更新のときなどに、空きかんの始末についても触れるようにし、ドライバーのマナーの

- ③ 飲料かんの「クズかごに捨てるように」という文字を、も

国の「空きかん対策」

「学校教育でのしつけを強化」など

防止対策8項目を検討中

向上を図る。

ら新しいかんに再生できます。

その上、回収かんを再生してアルミかんの地金を造るときにエネルギーは、原料のボーキサイトから新たに製造する場合に比べて、約二十七分の一ですむという、大きな省エネ効果があります。

「電気のかたまり」といわれるほどのエネルギーの大食漢——アルミかんの再資源化は年々進み、

- ④ 観光地の美化キャンペーンを充実させるとともに、鉄道・バスなどには、ポスターを通じて呼びかけを行う。
- ⑤ 市町村の広報活動を通じての一般市民へのPRをより充実させる
- ⑥ 空きかんの投げ捨ては、軽犯罪法、自然公園法、廃棄物処理法、道路交通法などの刑罰規定に触れる行為であることを知ってもらうようにする。
- ⑦ 自動販売機のそばはもとより、適切な場所にゴミ容器を設置するとともに、その維持管理を十分行う。
- ⑧ 空きかんをごみとして処理してしまうのではなく、業界も協力して、なるべく回収、再資源化を図るようにする。

五十四年度で約四分の一（製造量約二十億個のうち約五億個）となっています。

環境美化の点からはいうまでもないことですが、省資源・省エネルギーの面からも、空きかんの「ポイ捨て」をやめ、設置されたクズかごに捨てるようにしたいものです。